
深海の宇宙

U-BOOT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深海の宇宙

【Nコード】

N4833M

【作者名】

U-BOOT

【あらすじ】

時は1937年。船乗り達の間で流れた噂——「深海の怪物」。
その調査部隊に参加した少年が実際に、見て、聞いて、触れて、
感じ取った不思議な体験談——

序章・深海の怪物（前書き）

天使の書物がリハビリ作品として
手掛ける冒険小説が登場。

——時は1937年——

大西洋に流れた1つの噂——

——それは、『深海の怪物』。

太古より生き続けている、船を喰らう
怪物が大西洋を住処にしていると

船乗り達は信じ、畏^{おそ}れていた。

当初はただの噂に過ぎないと笑われたが
噂に対する認識が一変する
事件が起きる——

大統領より特命を受けて大西洋を
航行していた艦隊が一晩で消失、

噂は現実性を帯び始めた。

そして、この事態を看過出来ない
アメリカ政府は調査部隊を結成。

『怪物の住処』こと、大西洋に
彼らを送り込んだ――――

―――この物語は、大西洋の
調査部隊に参加していた少年が

実際に見て、聞いて、触れて、
感じ取った不思議な出来事を
綴ったモノである。

序章・深海の怪物

———大西洋・1937年———

『それ』は、ノコギリクワガタの顎を
連想させる口を開き、獲物が
近付くのを待ち構えていた———

だが、獲物と言ってもマグロや
カツオなどの『生きた魚』ではない。

皮膚は鉄で出来ており、

重油が貯め込まれた胃袋を持ち

ヒレの代わりにスクリューで
動く機械の魚。

そして、その中には40を超える生命が
息づいているに違いない———

「まだ見つからないのか？」

司令塔に響いた声は苛立ちを伴っていた。

「ハッ………未だに」

——ドイツ海軍所属のUボート
『U-36』の司令塔は『獲物』が
見つからない苛立ちと、

長時間の潜航による2酸化炭素の
増加によって生み出された

居心地の悪い空気で満たされていた。

「艦長、もう限界です。
諦めて浮上するべきでは？」

副官の言葉に腕組みして唸る艦長。

彼の中で『獲物』を討ち取り、栄誉を
手にせんとする軍人としてのプライドと

部下の身体を考え、浮上の命令を
下さんとする艦長としての責任感が

格闘が続けている。

「——やむを得ん、浮——」

艦長としての責任感が勝利の雄叫びをあげようとした時だった——

『獲物』が唸りを上げて近付く音が司令塔を揺さぶったのは。

「今のは何だ!？」

自らの中で繰り広げられていた戦いを中断させ、思考を

現状把握へと向ける艦長。

「ヤツです!——右舷40度より本艦に突っ込んで来ますッ!」

ソナーマンが恐怖に引きつった表情で報告する。

「なっ……!!——面舵いっぱ——」

凍り付いた思考で何とか命令を
下そうとした次の瞬間、

怪物の口が『U-36』の船体を噛み砕き、
40を超える生命は一瞬にして
海の藻屑と化した――――

登場人物紹介…その1

・エドワード・ターナー

・性別…♂

・年齢…16

・解説・

本作の主人公。7年前に両親と死別、
両親の友人が任されている工場で

機械の整備を学び、その腕が
アメリカ政府に認められる。

自分に対して本当の子供の様に
愛情を持って接してくれている

義父母の影響で純粋に育った

反面、集団を守るための残酷な行為

(例えば、戦えない味方を見捨てる)

はどんな事があっても出来ない。

・ジョージ・エーカー…

・性別…♂

・年齢…51

・解説・

エドワードの義父で、大工場の主任。

エドワードの父親ハワードとは

ハイスクール時代からの友人であり、

ハワードの忘れ形見である

エドワードには並ならぬ愛情を注ぐ。

・マリア・エーカー…

・性別…♀

・年齢…48

・解説・

エドワードの義母。

子宝に恵まれなかった為か、

エドワードを我が子として愛する。

・フランクリン・D・ルーズベルト…

・性別…♂

・年齢…54

・解説・

アメリカ合衆国第32代大統領。

特命を下した艦隊が大西洋で
消失した事件を受けて調査部隊の
編成を命じる。

・アドルフ・ヒトラー…

・性別…♂

・年齢…48

・解説・

ナチス・ドイツの総統。

大西洋に潜む怪物の調査を

潜水艦隊司令デーニッツに命じる。

・カール・デーニッツ：

・性別：♂

・年齢：46

・解説・

ナチス・ドイツ潜水艦隊司令。

アドルフ・ヒトラーの命を受けて

Uボートを大西洋に派遣する。

第1章・No. 1『来客』

——ここはアメリカ本土のとある工場。

その入り口の前に1台の高級車が停まり
中から背広を着た男が現れる。

男を訝しげに見つめていた守衛だったが
男が何かを見せると、急に緊張した
表情で普段はやらない敬礼をした。

「どうぞお通り下さい」

工場の中で1台の車と格闘を続ける少年。

『相手の急所』にドライバーや
スパナを突っ込み、

摘んだり捻ったりして1時間。

そして、やっと『相手』を打ち負かし、

エンジンが元気な声を上げる。

「見事なモノだな。流石は
我が国が誇る最年少メカニックだ」

いきなり後ろからした声に
振り向くと、そこには

背広を纏った男が立っていた。

「……………はい？何でしょう？」

少女のような可愛らしさを秘めた
顔に笑顔を浮かべながら

男の用件を伺う少年。

「失礼だが、この工場の責任者の方は
どちらにいらっしゃる？」

男の質問に少年は、やはり
可愛らしい笑みを浮かべて

案内いたします、と答えた。

「この工場の主任をなさっている
ジョージ・エーカー様ですね？」

背広の男が柔らかい笑みを
浮かべて確認する。

「私はビリー・ブライアン。
合衆国大統領の命を受けて

この工場より優秀な人材をお借り
出来るようお願いに参りました。」

大統領直属エージェントの証である
証明書入り手帳を見せながら

自己紹介と目的を明かすビリー。

一方、ジョージは大統領直属の
証である手帳に驚きながら口を開いた。

「一体何をなさるおつもりで？」

その間にビリーが問い返す。

「我々の目的の事ですか？」

深く頷くジョージ。

「——数週間前、大西洋で
新種の生物が確認されました。

合衆国政府は、この新種生物の
調査を決定、調査部隊の編成を
進めている最中なのです。

その調査部隊は各分野のエリートを
集めて完璧な体制を敷く予定ですが、

肝心のメカニックが……

我々の求める技術レベルを持つ

メカニックがなかなか見つからなくて
困っていました。——その時、

あなたの『息子さん』の
存在を知ったのです。

——彼こそ、

我々が求めていた人材です。

エドワード・ターナーさんを
調査部隊にお貸し頂けませんか？」

第1章No. 2『鉤十字の国』

——ドイツ第三帝国・ベルリン総統府

総統の執務室のドアを叩く音が響いた。

「入りたまえ」

口髭が特徴的な総統が入室を許可する。

それと同時に開かれたドア。

入ってきた軍人はドアを丁寧に閉めて
総統に向き直ると挨拶した。

「ハイル・ヒトラー！

お呼びですか、総統閣下」

軍人———デーニッツの挨拶に

満足そうに頷き、手招きするヒトラー。

「デーニッツ君。君に特命を下したい」

ヒトラーの言葉を受けてデーニッツの

身体に僅かに緊張が走る。

「ハッ！————特命とは？」

ヒトラーは、両手を顔の手前で組み、その上に顎を預けて口を開いた。

「以前より調査を進めてきた
大西洋の怪物の件だが————」

そう言いながらデスクから書類を
取り出したヒトラーは、それを
デーニッツへと手渡す。

デーニッツの視線が書類の上を
走るにつれて顔が青ざめていく。

「総統………アメリカの調査部隊に
先を越されたら我が国は………！！」

デーニッツの表情から彼が特命の
重要性を理解した事を察したらしく
ヒトラーは深く頷いた。

「デーニッツ君。アメリカの調査部隊が
怪物と接触する前にUボートで

撃沈したまえ。——こちらの存在に気付かれぬように慎重にな」

「總統府からの命令です。

『U33』の出撃準備を」

通信士官を通して總統府からの命令を拝領したUボート艦長。

「ヒルベルト・ヘルガ大佐、
宜しいでしょうか？」

Uボート艦長——ヒルベルト・ヘルガは
軽く頷き、Uボート乗員に命令を下した。

そして数十分後に係留アームが
切り離され、『U33』は大海原へと

進み出した——

第1章・No. 3 『出航』

数日後の夜、エドワードの迎えが
工場の入り口に現れた。

入り口に佇む漆黒の車から
山高帽とコートが印象的な
男性が降り立ち、工場の
インターホンに指を押し込む。

「政府の者です。エドワード君を
迎えに参りました……………」

その声が聞こえると同時に

『我が子』を抱き締めるマリア。

「気を付けてね、エドワード」

そしてエドワードの肩に、工場働きで
マメだらけになった手を置くジョージ。

「お前は父さんと母さんの大切な息子だ。それを忘れるなよ」

両親の言葉から温かい愛を感じ取ったエドワードは少女の様な笑みを浮かべ

ただ一言、言い放った。

「————行ってきます!!」

とある港に到着した車から降りたエドワードは男に案内され、

豪華客船並に大きな船と対面する。

「お……………大きい……………」

そこへ、体格の良い船員が現れた。

「おう、お前が例のチビッコか？」

体格の良い船員の言葉に
首を傾げるエドワード。

「機械整備が得意なんだろう？」

その問いにエドワードは

『はい』と答えた。

「俺はロブってんだ。宜しくな！」

豪快さを伴った笑顔で

エドワードの手を握るロブ。

（痛い痛い痛い痛い痛い痛い！……！
この握力、人間じゃないよっ！……！）

———大西洋海上———

ロブの手によって潰されかけた
手をさすりながら海を眺めるエドワード。

「—————綺麗だなあ……………」

雲一つ無い空に灯る満月と星達。

「おう、エドワード」

後ろからした声に

エドワードは悪寒を感じた。

「そろそろ寝た方が良いぞ」

――――

ロブの言葉に頷き、寝室に

向かう途中、エドワードの脳裏に

ある光景が浮かび上がる。

「――――！？」

海中に突き刺さる月光。

そして、月光が創り出す
巨大な魚のシルエット。

「……………!？」

気が付くと、目の前は
灰色の廊下に戻っていた。

「……………今のは何だったんだ……………」

————海中に潜む『U33』の
ヒルベルト・ヘルガ大佐は

一瞬、誰かに見られたような
気味の悪い感触に襲われた。

「……………ん……………?」

思わず下の方を見るが、そこは
何の変哲もない床である。

「艦長、どうされましたか？」

ヘルガ大佐に声をかける副官。

「――いや。」

少し疲れただけだ。それより目標は？」

艦長の問いにソナーマンが答えた。

「依然、捕捉中です」

「護衛は付いていないか？」

その問いにニヤリと笑うソナーマン。

「はい。周囲に反応はありません」

それが引き金となり、『U33』は
雷撃戦準備に取り掛かった――――

第1章・No. 4 『深海の怪物』

「魚雷装填完了しました!」

魚雷室からの報告を受ける発令所。

「よし、アメリカ野郎のどてっ腹に
キツい一撃をお見舞いしてやれ!」

ヘルガ大佐の命令で『U33』から
放たれた魚雷は海中を突き進み、

米国調査船のどてっ腹に
文字通り突っ込み、爆発四散した。

凄まじい衝撃で夢の世界から
引きずり戻されたエドワードは

状況を把握する為、甲板に上がった。

「!?!」

オレンジ色に染まる視界。

直ぐに肌で感じ取った熱気で
船が燃えていると理解する。

「…よう、生きていたか……チビッコ」

後ろから響いた弱々しい声に
振り向くと、焼け爛れた姿の男が
足を引きずっていた。

「ひいっ……………!!」

皮膚は焼け落ち、赤黒い
液体が顔面を流れている。

「……………俺だ……………ロブだ」

そう言いながら甲板に倒れるロブ。

「……………ロブさんっ!」

凍り付いた思考を何とか働かせ、
ロブのそばに寄るエドワード。

「……………俺は、もう保たねえ。」

……だがよ……お前みたいな
チビッコまで死んで欲しくねえんだ」

ロブはそう言いながら自らの
首に掛かるペンダントを外した。

「良いか、コイツを絶対に無くすな。
コイツを持っていれば…助けが来る」

エドワードが理解したのを悟ると
安堵の息をつき、二度と動かなくなった。

「——ロブさん？——ロブさん！」

これから共に沢山の思い出を
作るはずだった『仲間』の突然の死に
涙を流すエドワード。

そして、涙を拭ったエドワードは
オレンジ色に染まる海面に飛び込んだ。

『もう直ぐ合流ポイントです』

航海士が『船長』に告げる。

『ドイツのUボートの反応は
消えています。アイツが心配です』

『仲間』を案じるソナーマン。

一方、当の船長は水で一杯の
球形の水槽を眺めている。

そこには魚は無く淡水のみが
入った奇妙な水槽である。

『———む……………』

水槽の水が青白い光を放ち始めた。

『浮上せよ』

木片に掴まり、助けを待っていた
エドワードの首に掛けられた
ペンダントの石が

青白い光を放ち始める。

「―――!？」

暫くすると、海面が膨れ上がり
巨大な潜水艦が姿を現した―――

第1章・No. 5 『海の紳士』

潜水艦のハッチが開き、乗組員らしき人影が這い出てくるのを見たエドワードは安堵の息を漏らした。

——しかし——

「オイ……コイツはロブじゃないぞ」

「ナチスのスパイか………?」

そんな話し声に耳を疑うエドワード。

直ぐにでも逃げ出したかったが、長時間の漂流で、そんな体力はとうの昔に無くなっていた。

殺されるのを覚悟した次の瞬間——

「まだ子供ではないか……引き揚げろ」

威厳に満ちた声が鼓膜を震わせ、
上から引き揚げられる感触が
エドワードを安堵させる。

そして、その安堵感はあるを
眠りへと誘った――

体が締め付けられる痛みで気が付くと
船員らしき男2人がピストルを
こちらに向けているではないか。

「気が付いたか、スパイ野郎」

体格が良く、毛深い男が
いやらしい笑いを見せている。

「スパイは、そく銃殺だが、
殺すにや惜しいぜ。どれ、味見するか」

背が高く、ひょろりとした男が
エドワードの縄を解き、
後ろから羽交い締めにする。

「————なっ…………何を!？」

これから何をされるのか理解できない
エドワードが思わず叫ぶ。

「————何をするか、だってよ」

そう言ったひよろひよろ男が笑った。

「————決まってるんだろ、
このフネにゃ女は居ねえ。

「————分かるだろう？」

体格の良い男がエドワードから
シャツを乱暴に剥ぎ取る。

「————ツ!？」

やっと、何をされるのかを
理解したエドワードが絶句する。

「さあ、下の方も————」

男の毛深い手がエドワードのズボンを掴む。

「—————ひいっ！」

エドワードのズボンが今まさに
はぎ取られようとしていた。

—————その時—————

男の動きが止まったかと思うと、
彼の胸から赤黒い液体が溢れ出す。

「—————やはりゴロツキは
拾うべきでは無かったな……………」

渋く、落ち着いた声と共に
ひよろひよろ男の方も頸動脈を
断ち切られ、果てた。

「—————済まなかった、少年」

声のした方を向くと、浅黒い肌が

印象的で渋みが感じられる
中年の男性が、こちらを見つめている。

「死体はクルーに処理させる。
私に付いて来なさい」

男性に付いて歩くうちに戻ってきた
記憶のピースをはめ合わせ、

ようやく自分が潜水艦の中に居る事を
理解したエドワード。

（それにしても何て巨大な潜水艦だ……）

足に溜まりつつある疲労感が
雄弁に物語る潜水艦の巨大さ。

その巨大さに圧倒され、感動しながら
足を進めた先は一際立派な部屋だった。

「————私はこの潜水艦
『ノーチラス』の艦長、ネモだ。」

君の名を覚えてくれるか、少年」

ネモ艦長の紳士的な話しぶりに
緊張感を解された
エドワードが口を開く。

「名前は……エドワード。
エドワード・ターナーです」

その自己紹介に反応したネモ艦長の目。

「……………エドワード君か。
君、両親は居るのかね？」

その質問に少しだけ目を伏せながら
再び開かれるエドワードの口。

「実の両親は既に死んでいます。
けれど、義理の両親に実の子供の様に
大切にして貰っています」

顎に手を当てるネモ艦長。

「……………」
そうか
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4833m/>

深海の宇宙

2010年10月12日03時24分発行